

# 地藏・観音並列像資料攷

— 四川地域の造像例と靈驗説話 —

肥田路美

## 一 はじめに

北宋の常謹が端拱二年（九八九）に撰述した『地藏菩薩像靈驗記』には、地藏菩薩の画像や彫像にまつわる感応故事や不可思議な功德譚が三十二則収録されているが、その冒頭の「梁朝善寂寺畫地藏放光之記」は、梁代の画家張僧繇が描いた地藏菩薩と観音菩薩の壁画にまつわる記事である。舞台となった漢州善寂寺は、四川の徳陽—成都の北方六十キロにある地方都市の寺院で、並列して描かれたとみられる両菩薩像は、度々放光の奇瑞をあらわしてさまざまな功德を垂れ、「放光菩薩」と称されたという。

中国における地藏菩薩像の造像の始まりは、現存作品による限りでは初唐の七世紀後半とみられる。これは、玄奘による『大乗大集地藏菩薩十輪經』、実叉難陀による『地藏菩薩本願經』の訳出により、地藏信仰の核となる地藏菩薩の功德—すなわち、釈迦入滅から弥勒仏出生までの無仏の世に住して六道衆生を解脱せしめ、特に地獄か

らの救済を本願とするという大悲が説かれたのと時期を同じくしていることから、概ね実情に即した年代観といえよう。したがって、徳陽善寂寺の張僧繇画の説話は、年代の点からみても牽強附会の説には違いないが、たわいのない靈驗説話であっても読み方によっては有用な資料たり得る。なぜ四川なのか。またなぜ張僧繇なのか。

実際に地藏菩薩と観音菩薩を一對としてあらわした作例は、唐宋時代の石窟摩崖造像や絵画作品のなかに散見される。両尊を組み合わせたことについての經典上の根拠は希薄であるが、双方とも諸難救済、現世利益の性格を共通して有することが、一對化の主因となったのだろう。両菩薩は、阿弥陀如来や薬師如来を中尊として左右脇侍を構成したり、時に仏龕や窟口の左右両袖に配置されたりするとともに、しばしば同一の仏龕や画幅に並列させた形式であらわれた（本稿ではこれを地藏・観音並列像と仮称する）。これは、たとえば文殊と普賢の一對像とは大いに異なるありかたである。

そうした地藏・観音並列像は、中原の龍門石窟や響堂山石窟、敦煌莫高窟の壁画や藏経洞請来絹本画にも見出せるが、とりわけ四川

地域の摩崖造像においては作例が頻出する。漢州德陽善寂寺壁面の靈驗記は、四川での地藏・観音並列像のかような盛行と呼応するよう成立したものと推測できる。筆者の関心も、唐宋時代の四川地域で仏教信仰と造像活動がどのように推移したか、またそれは中原や敦煌の動向とどのような関係にあったのかについて、この図像を付け石として探るところにある。本稿は、そのための資料の洗い出しと若干の分析を試みるものである。

## 二 大足北山仏湾における地藏・観音並列像

四川地域（本稿では重慶市を含む四川盆地の範囲を指すこととする）において石窟や摩崖造像の所在する県は五十六県あり、そのうち十箇以上の窟や仏龕のある遺跡は実に三百箇所近くに及ぶ<sup>(1)</sup>。筆者はこれまでに広元（千仏崖、皇沢寺）、巴中（南龕、北龕、西龕、西龕湾、西龕流杯池、水寧寺）、梓潼（臥龍山、西龕寺）、綿陽（碧水寺）、邛崃（石笋山、花置寺、盤陀寺、鶴林寺、天宮寺）、蒲江（飛仙閣、仏尔湾、白岩寺、看灯山）、丹棱（鄭山、劉嘴）、夾江（千仏岩、牛仙寺）、樂山（凌雲寺）、資中（重龍山、西岩）、内江（東林寺、翔龍山、聖水寺）、安岳（臥仏院、千仏塞、円覚洞、毘盧洞、華嚴洞、玄妙觀）、大足（北山仏湾、南山、石門山、宝頂山）、忠県龍灘河仏龕を調査してきた。四川の石窟摩崖の総数からすれば一部に過ぎないが、陝西省に近い四川盆地北部地区、成都の近傍にあたる

西部地区、さらに大足に代表される東部地区にかけてほぼ満遍なく踏査することを念頭においた。その結果、予想通り地藏菩薩の図像を広い範囲で見出すことができたが、それと同時に、地域的な偏差も確認し得た。

風化や破損の進んだ窟龕においては、像種の同定は容易ではない。実際、尊像が二体並列した龕像はたいへん多いのであるが、地藏・観音であることを明記した造像銘を伴う作例は稀少であり、同定のためにはいくつかの図像的特徴を指標としなければならない。四川盆地東部にある大足北山仏湾は、四川地域の石窟摩崖のうちで最も地藏・観音並列像の豊富なバリエーションを保存しており、図像同定のための指標を得るのに有効な遺跡である。附表は、そのようにして得られた指標をもとに上記調査地において筆者が実見した地藏・観音並列像の作例に加え、胡文和の『四川道教佛教石窟芸術』、雷玉華ほかによる『広元石窟』、『巴中石窟』<sup>(2)</sup>などの各石窟摩崖に関する著作や報告書、張綏『地藏信仰研究』<sup>(3)</sup>をはじめとする諸氏の地藏菩薩関係の論著から抽出した作例を集成した結果である。遺漏や見誤りもあるが、四川の各地区におけるおよその傾向性は把握し得ると考える。以下ではまず大足北山仏湾において同図像の種々の様態を観察し、順次西部、北部へと辿りながら各地区の状況の比較を行うこととする。

一九八五年刊『大足石刻内容総録』<sup>(4)</sup>によれば、北山仏湾の全二百九十箇龕のうち、地藏・観音並列像を主題とするものは十五箇龕あ

り、そのほか既に風化、破損して像容の不明な二像並列龕のうちの多くが地蔵・観音の二菩薩像であったと推測できる。これら十五箇龕の画像について、附表の1〜15にそれぞれ地蔵像・観音像の形式を略記し、龕内に特筆すべき付属的モチーフがある場合はそれを挙げた。ここでは主要な作例のみ概観しておきたい。

第五八号龕(図1) 両尊をともに天蓋下の蓮華座に趺坐する形式であらわした保存の良い龕で、龕外左右に刻まれた乾寧三年(八九六)の銘文は、亡き「何七娘」の「早生西方受諸快樂」を願って「救苦観音菩薩地蔵菩薩一龕」を造った旨を明記しており、尊名と像容を対照できる貴重な作例である。造像主は昌州刺史王宗靖―韋君靖の後継。前蜀王建の猶子―と、亡者の婿にあたる節度左押衙趙師恪と記す。左尊は頭部を欠失しているが、僧祇支の上に胸飾をつけ



図1 大足北山仏湾第58号龕

袈裟を双領下垂にまとった地蔵像―但し頭部の破損痕からは、円頂であったか否かは不明―で、両手首から先を欠失するが、上腹部辺で左手に載せた持物(痕跡のみ)に右手を上から添えるような姿であったと推測できる。

右尊は宝冠を戴き冠繪を垂らし条帛、胸飾、瓔珞をつけ

た観音像で、両手とも肘以下を欠失するが、屈臂して胸前にやる形であったらしい。持物の有無は不明である。光背は双方とも火焰文を外縁部にあらわした宝珠形頭光と身光を負うが、両尊の間の観音の蓮華座あたりから雲気が立ち昇り、渦卷いた雲頭の上に合掌して(手先は衣内に隠す)跪坐した俗形の女子像が正面向きに浮彫されており、亡女の往生のさまを表わす。さらに並列像の左右には持物を捧げて上方から飛来し龕口に向かう乗雲の菩薩を配する。

この第五八号龕の左側の五二号龕と五三号龕は、地蔵・観音を両脇侍とした阿弥陀三尊であることが銘文により明らかで、参考資料となる。五八号龕開鑿の翌乾寧四年の紀年銘をもつ五二号龕では、説法印の阿弥陀坐像の左に地蔵、右に観音(銘文では「救苦観音菩薩」と称す)の立像を配す。地蔵は円頂で袈裟の内に胸飾をつけ、左手に大振りな宝珠を載せ右手を上添えて胸前で奉持した形で、五八号龕も同形式であったと見てよい。観音は右手を屈臂し(手先欠失)、左手を垂下して水瓶を執る。一方、第五三号龕は約二十年下の前蜀永平五年(九一五)の紀年があるが、様式は前の二龕とほとんど差異がない。定印阿弥陀坐像の右脇侍の観音立像も、手勢を左右逆にする(垂下した右手には楊柳枝を執るか)以外は五二号龕に大変類似する。地蔵立像は円頂で、耳朶に垂飾のある環を飾り(観音も同様の耳飾をつける)、袈裟の内に胸飾をつけ、左手を屈臂(手首欠)、右手を垂下する。右手先は風化して不分明ながら持物を執るようであるが、宝珠ではない。

